

「さて。行くか」

呟いて、高木は荷物を手に部屋を出た。鞆の中身は宿泊に最低限必要なものとノートパソコンだ。仕事用のスーツは、皺にならぬよう別口で二着持った。

行き先が幸い近場ゆえに、スーツの替えは取りに帰ればすむ。そのほかに不足品があっても同様だ。

あくまで、とりあえずの処置である。なにせ、これから二週間、高木は自宅を空ける予定だった。長期出張というわけではない。ただ、海老原宅への滞在が決まっている。ことの発端は、五日ほど前に遡る。

再会を機に連絡先を交換していた正美から、頼みがあるとのメールが届いたのだ。彼女が高木に振る話題は慶士絡みしかない。

折り返し電話をすると、おっとり口調でお願いされた。

「わたし、今度の日曜日から二週間、アシスタントたちと海外旅行へ行きますの。でも、兄をひとりで留守番させるのは、なんだか心配で。ですから、大変恐縮なんですけれど、那智先輩にお頼りしようかと」

「たしかに、あの人をひとりにするのはあらゆる意味で不安だな」

納得しつつも、慶士をさっくり置いていく正美に、内心で笑う。兄が心配なのは本心にしろ、ヘタレが服を着て歩いているといっても過言ではない彼だ。旅先で確実に足手まといになると踏んだのだろう。

慶士にしても、散々扱き使われている妹と、一緒に旅行はしたくなかろう。その後、正美が高木に彼女の自宅への宿泊を要請してきた。その際の台詞も、かなり笑えた。

「結婚前のプチ同棲ですわね。ひとつ屋根の下で互いに寝起きをともにして、それまで知らなかった魅力に気づいてもっとラブラブになるんですの！」

「了解した、善処する」

無論、高木に異論などなかった。むしろ、慶士と同じ空間で二週間も過ごせるのがうれしい。彼とつきあい始めて数か月が経つが、相変わらず互いに多忙で、週に一度会えればいいほうだ。なるべく連絡を取りあってはいるものの、いつだって直に触れたい。

視線や態度で高木を好きだと訴える慶士を知る分、なお愛おしい。

今日から毎日、可愛がりまくってやると思ううちに、マンションに着く。インターフォンを鳴らした。しかし、インターフォン越しに誰もされず、ドアが開く。

「那智くん、どうしたの？」

その無警戒ぶりに、高木は頭痛を覚えた。やはり、この人に単独生活は無理だとの結論に至る。番犬に琥珀がいるのがせめてもの救いとはいえ、実に危ない。溜め息を噛み殺し、少し低い位置にある美貌を見つめた。

「海老原に、留守中の慶士さんを頼まれた」

「え」

「二週間、世話になるんでよろしく」

「へ！？」

ぽかんと慶士が双眸を瞠った。どうやら、正美からはなにも聞かされていなかったらしい。どこまでも人が悪い妹だと思った刹那、ふと玄関脇の飾り棚に目がとまった。

そこには、定型外の茶封筒があった。『那智先輩とお兄ちゃんへv』との宛名つきだ。差し出し人は言わずと知れた正美だ。これについては、高木も聞いていない。なんだと思い、荷物を上がり口に置いて封筒を手にとった。中を覗くと、本が見えてピンとくる。そういえば、例の新刊が出たと言っていた。

それを取りだすと、「ひっ」と小さな悲鳴が聞こえた。かわいそうに狼狽しきりの慶士に、口元が緩む。

「手紙も入ってる。『那智先輩、兄をよろしくお願いします。ちなみに、このマンションは防音です♥』か。なるほど」

至れり尽くせりの将来の義妹がありがたい。ちらりと見遣った途端、慶士が逃げを打った。素早く手を伸ばして腕を掴む。離せと抵抗する彼を宥めて、居間へ行った。そこにあった大きなソファに、細い身体を背後から抱きこむ形で座る。

「ななな那智くん、なにするんだよっ」

「俺たちの初記念本を朗読？」

「うぎゃあ！」

馴染みの絶叫が室内に響いた。それすら、高木の耳には心地いい。涙ぐんで嫌がる姿も可愛いだけだ。BL台詞を読んで聞かせる合間に、赤く染まった耳朵や首筋を甘噛みした。

「やだ……那智く……っ」

「ココ、硬くしてるくせに？」

「ひうん」

早くも反応を示す慶士の股間を、服の上から撫でて擲揄する。眼前のローテーブルに、ゆっくりと本を置いた。誰のせいだと振り向いた彼の唇を塞ぐ。少々無理な体勢のためか、流麗な眉がひそめられた。すかさず、高木が細身の身体を反転させる。いわゆる、対面座位の格好だ。

「んんっ」

そうして、再びキスをする。口内奥へ緊急避難中の慶士の舌を絡めとる。きつく吸いあげ、唾液も交換した。キスひとつで蕩ける彼にほくそ笑む。吐息ごと奪う傍ら、華奢な腰を微かに浮かせて下肢の衣服を脱がせた。

「な、那智くん、まさかここで！？」

「海老原の原作に従おうかと」

「…正気ですか。ていうか、元はおれたち！」

「どっちでもいいが」

「よくな……んむっ」

頬を朱に染めて狼狽し、抗いかけた彼の口中に高木が指を二本含ませた。なにと文句を言われる。後孔を慣らすのにローションがないから、かわりに濡らしてと笑顔で答えたら、泣きそうに表情を歪めた。

羞恥で死にます。ええ、今すぐにでもといたげな反応が、高木の劣情をさらに煽る。唾液で濡れた指を慶士の口からぬき、すぐに双丘の狭間へ潜りこませた。

身じろがれたが、許さない。腿に抱えた彼が脚を閉じられぬよう高木も軽く膝を開き、晒された秘処内部を弄る。

異物の挿入に、慶士が小さく呻いた。無意識にだろろう噛みしめられた唇を、慰撫をこめて舐める。そっと、息を詰めるなど囁いた。ついでに、噛みしめてないで色っぽい声で啼いても言ってみる。

即行で、嫌だと拒まれた。しかし、弱い箇所を丹念かつ執拗に愛撫しつづけた結果、ほどなく願いが叶う。高木の恋人は、よくも悪くも快樂に極めて従順だった。

「あ……っああ、ん…や」

甘い嬌声をこぼして、慶士がしがみついてくる。もういきたいとの懇願を、まだと躲す。絶頂を先延ばしにするほど、彼は淫らに乱れる。こぶりの性器を根元で縛め、焦らした。

艶めかしい泣き顔を堪能しつつ、じっくり慣らした後孔から指をぬく。すでにお疲れぎみの慶士を、高木は手早く寛げた自らの下肢の楔で貫いた。

「ひゃう」

「く。毎度、よく締まる」

「ふ、あ……んんんっ」

熱く狭隘な粘膜にみっしりと包まれる。何度経験しても、この瞬間の気持ちよさはなにものにもかえ難い。さらなる悦楽を求めて、彼の双丘を割り開き、根本まで埋めた熱塊で突きあげた。

「や…ん、あ、あ、あっ」

挿入の衝撃でか、縛めをといた直後、慶士は達した。密着している高木の服へ、盛大に精液をぶちまけられたが、かまわない。自分も彼の中を濡らす。

「っは……あ、あ…」

ひときわ最奥を抉った瞬間、慶士がかすれた悲鳴をあげた。後孔の強烈な締めつけに、高木が呻く。その白い首筋に噛みつきながら、精を放った。

腕の中の細い肢体が震えている。『あ』の形に口を開けて、なにかに耐えるようにせつなげに眉を寄せる表情が堪らない。

ほどなく、体重をあずけてきた慶士を難なく受けとめた。忙しく呼吸する唇をやんわりと啄ばむ。長い睫毛を涙で濡らしたまま、彼が高木を睨んだ。理性が戻ってきて、文句のひとつも言いたくなかったに違いない。

「こんなところするなんて」

「原作どおりだろ」

「だからって！ ま、待てよ。うわ。この本のつづきが出たらどうしよう…」

怒ったそばから、いきなり思考を飛躍させる慶士がおもしろい。とはいえ、続編刊行は想定済みの高木が淡々と答える。

「だって、海老原だしな。出すんじゃないのか？」

「はう」

「海老原にその気がなくても、読者の反応次第では、出版社側が続編を依頼するだろうし」

打ちひしがれた様子の慶士が言う。

「もし出たら、那智くん、また本と同じことしそうでやだ」

「ああ。するね」

「…確定って」

呆然と呟く彼が可愛かった。愛しさあまって、つつき回したくなるが愛情ゆえだ。

「おれは嫌なんだけど」

「あいにく、俺は楽しい。慶士さんも、気持ちよさそうだったよな？」

「うう」

「まあ、提案型セックスってことで」

「て！？」

「斬新だろ。新鮮だし、マンネリ化も防げていいんじゃないか」

「……やっぱり、この人、鬼だ」

涙目の慶士に、緩々とかぶりを振って詰られる。鬼上等と思う高木は満面の笑みを湛えて、溺愛中の恋人の唇を塞いだ。